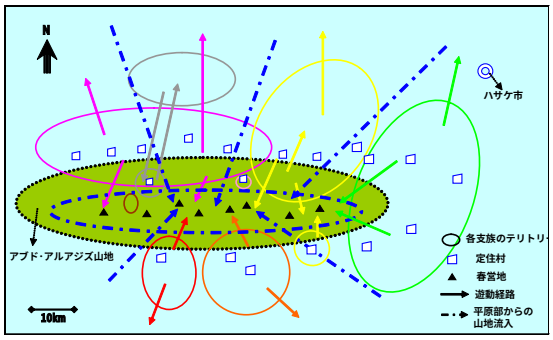
報告

シリアの牧畜社会の変容と資源管理

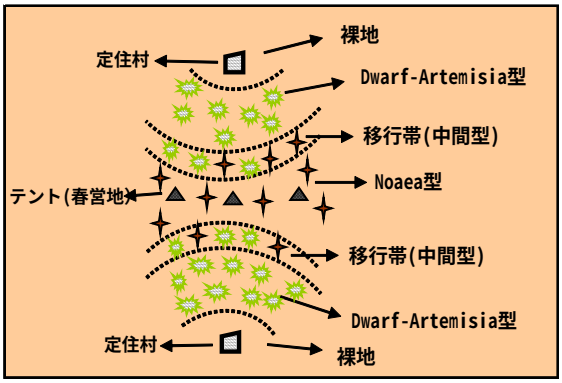
第 5 回：配列的な草原景観の形成

アブド･アルアジズ山地(以下、JAA)周辺には牧畜民の定住村が大小ふくめて 58 村存在している。しかし実際には牧畜民は家畜群をともなって季節遊動をくり返すので定住村とはいいながらも住民すべてが 1 年を通して 1 つの村に居住することはきわめてまれである。遊動距離は数十キロ程であるが、基本的に世帯別経営となるため、季節遊動により一部の住民が村からでていったり、逆によその村から別の牧畜民が入ってきたりする。JAAは晩秋ごろから人口ないし家畜頭数がだんだん増えていき春から麦収穫季までの 3〜5 月にピークに達する。山地全域における春営地の立地調査をおこなったのは 1996 年春[注]である。遊動は広域にまたがり、さらに内部の微地形の影響をうけ、様相はなかなか複雑であり、限られた期間内で分散したかれらの遊動の実態をとらえるのにたいへん苦労した。当時はGPSの精度はさほど高くなかったが(誤差±100m)、パジェロでJAAを駆けまわり、一時的に流入した全 466 世帯の地理座標をくまなくおさえていった。あわせて、部族(支族)名、出身村、JAAの滞在期間、宿営歴、遊動の動機等の聞きとり調査をおこなった。

紙面の制約から調査結果の詳細は省かざるをえないが、JAA の宿営地は世帯ごとの個別のつきあい関係で自由に選択されつつも、支族間で配分・分割されたテリトリーにより調整され定められること、同じ場所を数年つづけて利用する傾向があることなどが明らかとなった。JAA における部族、氏族の分割テリトリーと遊動経路を模式図で示すと右の通りである。一点鎖線の楕円内で示された山地中央部(以下、中央部)には恒常的な水源が存在せず、定住村は存在していない。しかし冬から春にかけての降雨により形成される水たまりや給水車による水補給で春営地が造営されるのは定住村周辺というよりむしろこの中央部である。遊動は、JAA の定住村からに加え、JAA 外の平原部からの家畜群が加わる。また積極的に遊動をおこなうのが所有家畜頭数の比較的大きな世帯が中心になることから中央部は過放牧気味となり、植生が退行しアカザ科の *Noaea mucronata* が散在する景観が広がる。他方、山麓部に立地する定住村周辺では恒常的な放牧圧がかかるものの春の重点的な放牧は中央部への季節遊動により回避される傾向にあるので放牧に起因する退行は相対的に軽微なものとなる。この放牧利用とともに、前号で示した毎日のパン焼きを背景とする薪採取慣行が草原へのもうひとつの人為圧として加わる。薪の採取量の観点からみれば、短期的な利用の春営地近辺より定住村の周辺におけるほうが圧倒的におおきい。またこの採取圧からは、ある程度の放牧圧により矮生化した *Artemisia herba-alba* が薪として不適なことから選択的に残される。したがって定住村のまわりでは、人口、家畜頭数が適正であるならば、矮生化 *Artemisia herba-alba* が優占する Dwarf-Artemisia 型の草原が展開する結果となる。さらに定住村と春営地のあいだには漸移的な中間植生型が形成されるため、JAA の草原景観は北から南へ帯状配列していることがわかってきた。こうした人為的に改変された草原景観の成立背景には、定住化の流れのなかで次第に形成された部族(支族)のテリトリー分割、遊動経路、種選択的な草原利用など規則性の備わった牧畜民の環境利用方法がおおいに関与したとみている。



遊動経路と各支族のテリトリー



草原景観の帯状構造

注：本調査は、ICARDA(国際乾燥地農業研究センター)-シリア国ハサケ農務局共同の JAA 資源管理プロジェクト(1993-96 年)において青年海外協力隊(JOCV)の一員として担当した牧畜民の環境利用に関する生態調査ないし社会経済調査の一環でおこなった。

シリアの牧畜社会の変容と資源管理

第６回：将来の資源管理への展望

2002 年シリアを 5 年半ぶりに再訪する機会を得て、アブド･アルアジズ山地（以下、JAA）を調査した。調査の目的は、住民であるバッガーラ族（以下、Baqqara）の参加型村落開発の可能性を探ることにあった。しかし、JAA の草原植生については、このシリーズで紹介してきたような配列的草原景観のおもかげはすでに消えており、さらなる植生変化を目の当たりにすることになった。1950 年代末以降の Baqqara を中心とした牧畜民の定住化の歩みとともに放牧や薪採取という人々の営みを大地に刻み込みつつ、40 年余りの歳月をかけて少しずつ形作られてきたあの草原分布はみごとに破壊されていたのである。

近年 JAA の草原が破壊された最大の理由は、山地周辺で 1979 年ごろより開始されて、じょじょにその区域をひろげてきた国による植林事業の展開にあった。1990 年後半以降、植林が加速度的に進行した結果、牧畜民の従来からの草原利用に大幅な変更が加えられ、利用範囲が手狭となった牧畜民が残された特定の放牧地への移動を余儀なくされた。もともとは社会的規範のなかで支族間による住みわけがなされていたが、放牧地利用の混雑による重なりあいから一部で過度な集中を招いてしまった。このような顕著な過放牧による草原植生の退行・劣化を引き起こす一方、植林による保護区に目を転ずると、植栽後の灌水などきめこまやかな管理がどうしても行き届かず、松やピスタシアなど植林樹木種がほぼ全滅にちかく枯死してしまっている。それまで牧畜民の里山として、その生活様式によって加えられていた山地植生への圧力がとりはらわれて、shrub 類が雑草として繁茂することになった。この shrub 類の過繁茂は樹木生育の阻害要因となるだけでなく、夏の乾季におけるたび重なる野火の発生など自然災害を生みやすい状況を生み出している。

結果として、JAA の草原は、過放牧と過繁茂との対照的で極端なふた通りの植生へと移行、分化してしまった。いったい牧畜と植林というこの根本思想が相異なるかにみえる土地利用方式の両立はむずかしいのであろうか。今日の JAA の状況をみる限り、どちらの土地利用も成功しているとは言えず、どっちつかずの袋小路に陥っているようにおもわれる。ここに牧畜民が利用する空間のなかで、やや一方的に強行実施した乾燥地における植林活動の難しさを痛感させられるのである。また、50 年まえの耕作地拡大による放牧地の減少化に対し、新たに資源適応しながらその困難を乗りきり牧畜を継続してきた Baqqara にとっても、今回の植林による保護区拡大は牧畜という生業自体を維持していけるかどうかの大きな瀬戸際に立たされていると言える。かれらが定住村に住み続けながらあくまで牧畜をつづけていくとしたなら、もはや放牧ではなく、近隣農村部から農産物残渣等の補助飼料を入手しながらの、より集約的な家畜管理の方向性を探ることになるしか道は残されていないであろう。薪採取については、密な shrub の除草と位置づければ、植林と共存していくことは十分可能であると考えられる。一方、植林後の資源管理にとっても、このように住民をもうすこしうまく巻きこんで、相互協力体制を築いていくことが今後の切実な課題になるとおもわれる。しかし、さらにこういうことも言えるのではないだろうか。Baqqara は JAA に長年住みつづけるなかでかれらの生活資源としての草原植生に対して豊富な知識や経験を蓄えてきた。だからこそ、前号でみたように、むやみやたらに植生を利用するのではなく、牧畜民として草原を選択･評価した結果、ある種整然とした配列的草原植生景観が形成せられてきたのだと考えられる。われわれはしばしば資源管理と称して、衛星画像を処理することや、GIS を活用しながらの植生図など資源図作成を想起する。これを資源管理の外からの眼とするなら、他方で住民による内からの眼を取り入れて、両者を結合させて複眼の資源管理としてみていくことが地域植生をより深く理解するうえで重要な課題になってくるのではないか。将来、再びわたしが JAA にはいって活動する機会があるならば、牧畜民の草原植生に対する内なるまなざし、すなわちかれらの民族植物学的視座を加味した資源管理のスタイルで望みたいと考えている。



1990 年代半ばの草原植生の状態



過放牧により枯死した
Artemisia herba-alba



植林保護区：植栽されて 6 年目の
Pinus spp. と過繁茂の shrub 類

あとがき

国際耕種株式会社　代表取締役　古賀直樹

この「シリアの牧畜社会の変容と資源管理」は、1993 年から 96 年にかけて行った現地調査と、2002 年の再訪調査をもとに、AAI News に全 6 回にわたり連載したものである。最初の調査では、青年海外協力隊の一員として、ICARDA とシリア国ハサケ農務局によるアブド・アルアジズ山地の資源管理プロジェクトに参加した。牧畜民の季節移動や土地利用を調べながら、放牧と薪採取が草原植生にどのように関わっているかを考えた。

調査からはおよそ 30 年、連載からも 20 年ほどが経過した。その間、シリアでは 2011 年以降の内戦と IS の台頭などにより、人々の暮らしを取り巻く条件が大きく変わった。本稿で記した集落や放牧経路、支族間の土地利用の取り決めも、当時のまま続いているとは考えられない。また、それぞれの集落や世帯がその後どのような経過をたどったのか、筆者自身が現地で確認できているわけではない。本文中の「現在」や「将来」は、調査・執筆当時のものとして読んでいただきたい。

あらためて読み返すと、牧畜民が山地草原とムギ類の刈あと耕地を往復し、異なる資源を組み合わせながら生業を続けていたことが印象に残る。その利用には、支族間の調整や、植物を選び分ける知識も関わっていた。草原の状態だけを見ても、こうした人々の営みまではわからない。最終回で「複眼の資源管理」と記したのは、外からの調査に、住民が土地や植物を見る眼を重ねる必要を感じたからである。当時の記録が、これからのシリアの暮らしと資源管理を考える際の、ひとつの手がかりとなれば幸いである。